高校の部　最優秀賞

大切な家族の存在

島根県立大田高等学校　1年
和田　悠良（わだ　ちから）

僕は昨年、大切な家族の一人であった祖母を亡くしました。祖母は突然亡くなったわけではなく、元気な状態から介護が必要な状態になり、そして亡くなりました。さきほど「大切な家族の一人であった祖母」と言いましたが祖母を介護するまで僕は正直祖母のことをよく思っていませんでした。

祖母は畑作業をすることがとても好きでした。野菜や果物を作っては近所の方や親戚に配ったりしていました。その一方、片付けがとても苦手で、自分の使ったものを片付けず、そのままにしていることがよくありました。そのことで僕の父とよく喧嘩もしていました。

高齢になって耳も遠くなり、何度も聞き返してくる祖母との会話を、僕はとても面倒くさく思う時もありました。もちろん祖母に悪気がないことはわかっていましたが、どうしてもそれを認めることができない僕がいて、高齢になった祖母にどう接すればいいのか、実際よく分かりませんでした。ですが、年を重ね

衰えていく祖母を見ると、かわいそうという気持ちがだんだん芽生えてきました。

そして、少しでも祖母の辛さを理解したいと思うようになり、毎日祖母の部屋に行くようになりました。

「祖母に対して１０秒でできることなんてたかが知れている。でもそれを３６０回積み重ねると1時間になる。その1時間で僕は祖母に何ができるだろうか」

そんなことを思ったりもしていました。

一方一つの案として、祖母には施設に入所してもらうのもあるのかなと思っていました。そうしたら家族の負担も減り、専門的な介護が受けられると思う一面、祖母が家族から離れて、大好きな畑作業が出来なくなってもいいのかという思いもありました。このことについて家族で相談した結果、出した答えは、家でみんなで過ごすというものでした。

その日から夜ご飯の時に祖母の手を持って支え席に座らせ、食べ終わったら部屋に連れて行き、薬を飲ませる事が僕の日課になりました。初めはやらされている感じがありましたが、ずっとやっているうちに、祖母のために何かする事にやりがいを感じるようになりました。

そのうち祖母は体力も無くなって来て、自力で立つことが困難になってきました。僕と祖母しか家にいない日に、祖母がトイレに行き立てなくなりました。手伝いに行った僕に祖母がこん

なことを言いました。

「迷惑ばかりかけてごめんね」

それを聞いて僕は「全然そんなことないよ。頼っていいけんね」

という言葉がとっさに出ていました。これには自分でも驚きました。祖母を介護するまでは迷惑だと思っていたのに、介護をするようになってからは祖母の為に何かしてあげたいと思うようになっていたのです。祖母からすると今の状態は先の見えない暗闇に一人たたずんでいるようなもので、その不安に心が折れそうになっていたかもしれません。そんな祖母を見るにつけ、何とか残された時間を楽しく過ごしてもらえたらと思って接するようにしました。

それから何日かして祖母は救急車で運ばれてました。その日を境に家族に覚悟みたいなものが生まれたように感じました。次の日家族でお見舞いに行き、祖母と話をしました。そして午前2時ごろ親戚からの連絡で病院に駆けつけると祖母が息を引き取るところでした。

それでも僕は後悔をしませんでした。祖母の最後を見ることができたし、祖母の介護をするうちにこんな事ではいけないと自分自身が変わることができました。祖母にはとても感謝しています。

一人では辛い暗闇を共に歩ける家族の存在がいかに大切か、

それに気づくことができました。求めるものは光そのものではなく、光を一緒に探すことのできる誰かの存在であると感じることができました。

これからは、高齢者だからとか、病気だからとかにとらわれず、どんな人にも同じように接して、そして祖母のように困っている人には何か出来ることが無いか考えて行こうと思っています。それに気付かせてもらえた祖母と過ごした日々に感謝しています。